



写真集でめぐる一九三〇年代関西モダニズム

松實輝彦

芦屋カメラクラブ

第1回

『アシヤ写真サロン 1935』

戦間期における関西のモダニズムを代表する写真家の一人に中山岩太がいる。その中山がリーダーとなって、一九三〇年に結成されたアマチュア写真家団体が芦屋カメラクラブである（以下、芦クと略記）。芦クは少人数ながらも発足当初から全国的に注目される存在となった。それは結成とほぼ同時期に、中山が朝日新聞社主催の「第一回国際広告写真展」で一等を受賞、賞金一千円を獲得して、一躍写真界の寵児となったからである。そのこともあって「新しき美の創作／新しき美の発見」を掲げる芦クは、新興写

真運動の先頭集団として、新聞・雑誌といった当時の有力メディアから脚光を浴びることになる。

勢いに乗る芦クはその後もさらなる飛躍を目指し、写真誌『アサヒカメラ』を後援に付けて、全国公募の写真展「アシヤ写真サロン」を企画する。『アサヒカメラ』一九三五年一月号に公募が告知され、同誌十月号に入選者の氏名が発表されると、同年九月下旬から十一月中旬にかけて「アシヤ写真サロン」展は東京、大阪、京都、鳥取、福岡、大連を巡回。いずれの展覧会場も大盛況であった。



この展覧会と軌を一にして刊行されたのが『アシヤ写真サロン 1935』である。芦クの中心メンバーである紅谷吉之助が編集兼発行人となり、九月三十日に芦クから発行された。裏刷りのない図版頁に番号・タイトル・作者名が表記され、巻末には作品のデータと作者コメントが列記された、いたってシンプルな造りの小さな写真集である。計九十六点の入選作が収録され、奥付には「実費八十銭」と刷られている。表紙はリーダー中山による作品である。写真集内の収録作とは異なるオリジナルのイメージであ

り、この時期の彼の代表作「海のファンタジー」と同系列の作といえる。様々な種類の貝殻やタツノオトシゴといったモチーフは、中山が日課としていた居住地近くの芦屋浜での散歩の際に蒐集されたものである。

写真集を開いて、ゆっくりとめくっていこう。やはり主催する芦クの同人たちの作品に興味深いものが多い。松原重三の砂、歯車、雲形定規、数式が書かれた紙片等を配した理知的で謎めいたフォトモンタージュ。紅谷吉之助の風呂敷、羽子板の羽根、浮世絵による和風感覚満点の構成写真。ハナヤ勘兵衛は原板を重ねて光と影の中に女性像と無機物を組み合わせておけることで、内面的なドラマ性を強く打ち出している。また全国公募という点から、野島康三や桑原甲子雄といった関東の著名な写真家たちの作品も数多く収められていて見応えがある。なかでも木村伊兵衛の「茶房の女」は、東京・木挽

町のカフェで働く女性の何気ない所作が巧みな構図で切り取られており、スナックプシヨットの名手による気品が香り立つ逸品といえよう。ちなみに同作は屋内撮影の手本として木村自身の著作『小型カメラ写真術』（一九三六年）や『小型カメラの写し方・使ひ方』（一九三七年）にも収載されており、この時期の代表作のひとつに数えられるものである。

芦クのリーダー中山と木村の活動拠点はそれぞれ西と東とに隔たつてはいた



木村伊兵衛「茶房の女」

が、長きにわたって盟友と呼べる間柄であった。木村は野島康三が主宰する研究会に出入りして野島と親交を深めると、野島が出資者となって木村と中山に声を掛け、三人の同人による写真誌『光画』が一九三二年に創刊される。日本の新興写真運動を代表するその写真誌を舞台に、木村と中山は互いに切磋琢磨しながら優れた写真作品を作り出していったのである。『光画』の活動期間は二年足らずであったが、東京での月一回の編集会議に中山は欠かさず芦屋から駆けつけた。会議の後、二人は夜の街に繰り出して酒杯を重ねながら、明け方まで写真談義にふけたという。

一九四九年一月、中山は脳溢血で倒れ、五十三歳で急逝する。木村の追悼文は、桑原甲子雄が編集長の『カメラ』同年六月号に掲載された。「中山さんの場合理屈じゃなくて、第一回個展の感覚が年と共に円熟し、美の深さが掘り下げら



井上章「斜陽」

れていくことが作品の一つに、実証されてくるのです。現在の僕にとっては、そのことがうらやましくてたまらないのです。本当にいい仕事をしてくれたのです」と盟友を称え、「酒と煙草と写真に対する情熱の遺産は必ず僕がひきつぐことにします」と擱筆し、哀悼の意を表した。

それでは再び写真集に戻って、関西モダニズムの香りを感じさせる一点を見てみよう。井上章の撮影による「斜陽」である。巻末の作品データには「神戸居留地、六月下旬、晴天、午後五時、ダゴール

6・8付手札クラップカメラ、イゾクローム乾板」とある。単語の羅列であるが、それでも十分に有効な情報が含まれている。まず撮影地が現在の神戸市中央区に設けられた旧外国人居留地であること。東洋でも指折りの美しい居留地と評され、関西圏の貿易の拠点となり西洋文化の入り口としても大きな影響を与えた場所である。日本側に返還された一八九九年以後、大正・昭和初期には日本の商社や銀行等が進出して、ビジネス街としての発展を遂げて現在に至っている。次に六月下旬という時期であるが、「アシヤ写真サロン」展への出品締切りが七月だったので、作者はそれに間に合うように梅雨の合間の晴天の機会をうかがっていた、と考えられる。データの最後は使用機材についてである。「ダゴール」はドイツの大手カメラメーカーが製造した人気のレンズで、高いコントラストの表現が特徴とされる。「手札クラップカメラ

ラ」は手札（IIガラス乾板）を使用するタイプの、蛇腹で鏡胴部分が折りたためるカメラのこと。この作者が使用したカメラ自体は不明だが、ドイツ製ならばアングーが当時の有名な機種だった。日本製のクラップカメラでは、パーレットやミノルタといったより安価な機種がすでに販売されていた。さらに作者は巻末頁に次のようなコメントも残している。

私は、カメラが非常に重い上に乾板を常用してゐる関係から、何処へ行くにもカメラをしのばせて行つてスナツプをして来ると云つた真似はとて出ませんのでいつも通学の途上や散歩の際など目を光らせて、画になりさうな処を見付けて置きます〔。〕そして改めて同じやうな天候、時刻に出直して固めて撮つて来ることにしてゐます。之もそう云つたもの、一つですが、丁度狙つてゐた場所に三五年型のパツ

カードが止つてゐて呉れたのなどはもつきの幸ひでした。

このコメントから、作者は神戸近辺に在住する写真撮影好きの学生だと見当がつく。ライカに代表されるスナップシヨットに有効な小型カメラは、学生にとってまだ高嶺の花だった。下見を済ませておいた撮影ポイントに赴き、クラックカメラを路面近く、ややアオリ気味にセツトして、モダンガールが通りを横切るシャッターチャンスをじつと待っていたのだろう。連れ立って歩くモガたちの後姿。強い西日の逆光で判りづらいが、洋装のモガはクロシエ帽をかぶっているようだ。白いロングスカートに同色の太いベルトが印象的だ。その隣の和装の女性もモガである。この時代はまだ和装のモガも多かった。服装の如何にかかわらず、海風に吹かれながら彼女たちは港町の散策を楽しんでいるようだ。また、画

面右手前に写り込んでいる車は一九三五年に発売されたパッカーD120である。「その価値はオーナーに聞け」のキャッチコピーで知られるアメリカの高級車だが、写真の車は販路拡大のために中級車として大量生産された廉価モデル。パッカー社はその年にこのモデルを二万五千台以上販売したが、そのうちの一台が初夏の神戸旧居留地の一角で撮影されていた。遊歩するモガたちとアメリカの新型車を強いコントラストのなかに定着させた井上章の「斜陽」は、ハイカラな港湾都市・神戸のモダニズムをいきいきといまに伝えるイメージである。

「アシヤ写真サロン」はその後、途中一年間の休止期間をはさみながらも一九四一年の第六回展まで公募を行い、各地で展覧会を催し、計四冊の写真集を発行した。芦クが公募展を終了させたとき、日本はもうまもなく太平洋戦争に突入するというタイミングだった。そして

多くの写真家団体と同様、戦時下での社会状況の逼迫にともなつて、中山をはじめ芦クのメンバーもその活動を停止する。振り返ってみると「アシヤ写真サロン」の開催は、ちょうど時代の曲がり角にあたる時期だったといえよう。新しき美の創作と発見を掲げる芦クの、さらなる飛躍を期した新機軸の取り組みではあったが、メンバーたちの思い描いた通りに進展することはなかったのである。それでもリーダー中山岩太の提唱した写真集というかたちでの誌上展覧会は、芦屋という阪神間の一地域からひろく全国に写真の魅力をアピールし、多様な地域の写真家との交流を生んだという点で、その成果はけつして小さいものではなかった。ただ、それをもって「もつきの幸い」などと言うには、いささか気が引けるのだけれど。

(名古屋芸術大学 まつみ・てるひこ)